

アイロニーとは何か？

— 言語現象としてのアイロニーのモデル化の試み —

内海 彰

東京工業大学 大学院総合理工学研究科システム科学専攻

utsumi@sys.titech.ac.jp

1 はじめに

比喩とともに我々の日常生活に多く観察される非字義的な言語表現としてアイロニーがある。出来の悪い新入社員に対しての上司の発話「君って本当に優秀だね」などはその典型的な例であり、このようにアイロニーは言語表現の文字通りの意味の反対を意図するという一見単純な修辞法であると見なされることが多い。しかし実際にはアイロニーという言語現象を特徴づけるのは非常に困難であり、そのため今までに言語学や心理学などの分野でさまざまな議論が行われてきた。しかしいずれの研究も (Q1) アイロニーとは何か, (Q2) 聞き手がどのようにしてある発話をアイロニーと認識するのか, (Q3) 話し手がアイロニーを用いて何を意図するのか, という問いに対する十分に満足な解答を与えているとは言い難い。

一方、アイロニーの計算モデルや計算機処理を指向した研究はいくつかの例外 [5, 7, 10] を除いて皆無である。しかし (a) アイロニーの認識や理解には文脈・状況の理解が不可欠である, (b) 非字義性は自然言語の本質的な機能の一つである, (c) アイロニーはさまざまな伝達目標を達成することができる [8] などの理由からアイロニーの計算モデルの研究は重要なテーマである。

そこで本稿ではアイロニーの計算モデルの構築に向けての第一歩として、上記の問いに対する適切な説明を与えることのできるアイロニー論を提案する。提案する枠組みの本質的なアイデアは、(a) アイロニーとは現在の発話状況がアイロニー環境という3つの特性を持つ状況であることを聞き手に暗黙のうちに提示する (implicitly display) 言語現象である, (b) しかし聞き手はこれらの3つの特性のうち少なくとも2つの特性が成立することを認識すればその発話がアイロニーであると見なしているという2点にある。なお本稿ではアイロニーという用語を言語アイロニー (verbal irony) を意味するものとして使用し、状況アイロニー (situational irony) は本稿で提案する枠組みの対象外とする。

2 従来のアイロニー研究

従来のアイロニー研究は、文字通りの意味の反対という古典的な定義を拡張する語用論的アプローチとアイロニーを一種の言及 (mention) であるとみなす認知

的アプローチに大別することができる。

語用論的アプローチの代表例としては、Grice[2]の質の公準違反による説明が挙げられる。彼によるとアイロニーは質の公準を表面上違反することによって字義的な意味の逆の意味を伝達する言語表現であると説明される。しかし多くの研究者 [3, 4, 9] が指摘しているように、質の公準違反がない/認識されないアイロニーの存在 (例えば、図1の一般化表現 (2a), 控え目な表現 (2c) やこだま的アイロニー (5a)), 質の公準を違反しかつアイロニーでない言語表現の存在、および平叙文以外のアイロニーの存在 (例えば、疑問文 (1b) や依頼 (2b)) によって、この説明が全く不十分であることは明らかである。Haverkate[4] はこれらの問題点を踏まえた上で、質の公準違反という基準を不誠実性 (insincerity) というより包括的な概念に拡張した。この理論では、アイロニーをその表現が遂行する言語行為の誠実性条件のいずれかを意図的に違反している言語表現とみなすが、これも Grice のアプローチと同様の問題点 (例えば (2a), (2c), (5a) などの誠実性条件の違反を含んでいないアイロニーの存在) を内在している。

一方、認知的アプローチの発端となる Sperber と Wilson の Mention Theory (MT) [9, 13] では、アイロニーとは誰かに帰すべき見解・言葉に解釈的に類似した表現に言及することによって話し手の心的態度を表明するものであると考える。しかし彼らの言及という概念では説明できないアイロニーの存在 (例えば (1b), (1c), (4b)) やアイロニーではない言及表現の存在などにより、この理論もアイロニーの一部を説明するに過ぎない [3, 6]。

以上の問題点を解決し包括的なアイロニー理論を構築するためには、これらの2つのアプローチの統合が不可欠である。ごく最近になってこのようなアイロニー理論として Allusional Pretense Theory (APT) [6] が提案されている。この理論では、アイロニーは成立しなかった期待に言及 (allude) しつつ、言語行為の適切性条件のうちの一つを違反している表現であるとされ、この定義によって従来の研究よりも多くのアイロニーを説明することが可能である。しかしこの理論も、言及の概念の不明確さ、適切性条件の違反では説明できないアイロニーの存在 (例えば (2a), (2c), (5a)), 従来の研究で指摘されてきたアイロニー標識 (ironic cues) については何も説明できないなどの問題点がある。

例1 おなかが減って眠れないので、妻が食べようとしたピザをまるごと平らげてしまった夫に向かって、

- (1) a. ああ、本当におなかがいっぱいだわ。
- b. 私のピザはどこにいったのかしら？
- c. ピザをもう一切れいかが？
- d. もっとピザを食べなさい！

例2 部屋が寒いので窓を閉めてと何回も頼んだが、テレビを見ていて頼みを全く無視している兄に対して妹が、

- (2) a. 私は暖かい部屋が好きなの。
- b. もうしわけありませんが、どうか窓を閉めて頂けませんか？
- c. この部屋、ちょっと寒いみたいね。
- d. 面倒なことを頼んでごめんください。

例3 頼まれもしないのに夫が馴れない皿洗いをしたばかりに、大切にしていた食器を壊されてしまった妻が、

- (3) a. まあ、お皿を洗ってくれてありがとう。
- b. 食器を大切に扱ってくれてありがとう。
- c. 皿洗いをしてくれるなんて偉いわね。

例4 楽しみにしていた海水浴が台風のために中止になったことを知って、どしゃぶりの雨を窓から見ながら、

- (4) a. おお、今までの人生で最高のいい天気ね。
- b. これじゃあビーチは人でいっぱいだよ！

例5 会社の同僚の「おれのほうが君よりはやく出世するよ」という発話に対して、

- (5) a. へー、君のほうが僕よりはやく出世するの。
- b. もっと仕事したほうがいいんじゃない？

図1: アイロニーの例

3 アイロニーの暗黙的提示理論

本稿では2章の議論をもとに「アイロニーは現在の発話状況がアイロニー環境によって囲まれた状況であることを聞き手に暗黙的に提示する言語表現である」と主張する。本章ではこの主張の核心であるアイロニー環境とその暗黙的提示について詳述し、本研究が従来の研究より優れていることを示す。

3.1 アイロニー環境の暗黙的提示

まずある発話 U がアイロニーとなるには、話し手はアイロニー環境によって囲まれた状況のなかで発話を行なわなければならない。

定義 1 時間に関する2つの状況 T_0 と T_1 (T_0 は T_1 より時間的に先行する) を含む状況が以下の3つの条件を満たしているとき、その状況はアイロニー環境によって囲まれた状況であるという。

1. T_0 において話し手が何らかの期待することから E を持っている。

2. T_1 において話し手の期待 E が不成立となる。

3. 結果として期待と現実との間の乖離・不一致に対して話し手はある種の心的態度・感情を持つ。

図1に示した5つの状況はすべてこの3つの条件を満たしている。例えば、例1の状況では話し手である妻の期待「空腹をみたく」が聞き手である夫の行為(ピザを食べる)によって不成立となり、妻がそれに対してある感情(不満, 怒り)を抱いている。なおここでいう「期待」という概念は個人的な期待から社会的・文化的な慣習や規律までもを含んでいる。また従来の研究では例5の(5a)のようなごだますのアイロニー (provoked irony) を扱うために他人の期待や発話・意見なども言及の対象としているが、これらを「聞き手の発話内容・期待が成立しないことを聞き手が知る」という話し手の期待と考えるほうがより適切な説明を与えることができる。例えば、例5の話し手の期待は「同僚のほうが早く出世することはないことをその同僚が知る」となる。

アイロニー環境は話し手の期待 E の不成立の理由によって以下の4つのタイプに分類することができる。

- 期待 E が意図的な行為 A によって実現可能である
 - 他の行為 B によって行為 A が失敗したために、 E が不成立になった場合 (type-1)
 - 単に行為 A が遂行されなかったために、 E が不成立になった場合 (type-2)
- 期待 E が通常考え得る意図的な行為では実現できない
 - 行為 B の遂行によって E が不成立になった場合 (type-3)
 - E が単に不成立になった場合 (type-4)

例えば、図1では例1から例4までがそれぞれ type-1 から type-4 に相当し、例5は type-3 に相当する。

定義 2 発話 U が以下の3つの特性を満たしているとき、 U はアイロニー環境を暗黙的に提示しているという。

1. 発話 U は期待 E に婉曲的言及 (allude) する。
2. 発話 U は何らかの語用論的原則に表面上違反することによって不誠実性を含む。
3. 発話 U は話し手の心的態度・感情を暗示する。

3.2 婉曲的言及

P を発話 U の命題内容を表す命題または行為、 Q を期待 E を表す命題とする。 P が表1に示す5つの条件のうち少なくとも一つを満たしているとき、発話 U は期待 E に婉曲的言及するという。なお表1において P_1 が P_2 を指示するとは、 P_1 の内容全体またはその一部が P_2 と照応関係にある (P_1 が照応詞 (anaphor) である) ことを意味している¹。

表 1: 婉曲的言及

条件	図 1 の例
1. P が Q を指示し, かつ「 Q を期待する」という内容の命題を指示しない	(1a) (2a) (4a) (5a)
2. P が Q や行為 A の前提条件 X , または X を効果とする行為 C を指示する	(1b) (2c) (5b)
3. P が Q から導出される含意 Y を指示する	(4b)
4. P が Q を効果としてもたらす行為 A を指示する (type-1 または type-2)	(2b) (2d)
5. P が Q を効果とする行為 A を妨げる行為 B , 行為 B の前提条件 W , 行為 B の効果 Z のいずれかを指示する (type-1 または type-3)	(1c) (1d) (3a) (3b) (3c)

表 2: 言語行為のタイプによる語用論的不誠実性の分類

言語行為	語用論的不誠実性	図 1 の例	
陳述表現型	誠実性条件の違反 (S は命題 P を信じていない)	(1a) (4a) (4b) (5a)	
	関連性の原理の違反 (命題 P が関連性を持たない)	(2a)	
	量の公準の違反 (命題 P が必要とされる情報を提供していない)	(2c)	
行為指示型	質問		
	依頼	誠実性条件の違反 (S は H が行為 P をするのを望んでいない)	(1b)
	助言	丁寧さの原理の違反 (丁寧すぎる)	(1d)
行為拘束型	提供	誠実性条件の違反 (S は H が行為 P を望むとは思われない)	(2b)
		準備条件の違反 (S が行為 P を行なうのは不可能である)	(5b)
		誠実性条件の違反 (H は S が行為 P をするのを望んでいない)	(1c)
感情表出型	感謝	準備条件の違反 (S が行為 P を行なうのは不可能である)	(1c)
	賛辞	誠実性条件の違反 (S は H が行なった行為 P に感謝していない)	(3a)
		命題内容条件の違反 (H が行為 P を遂行していない)	(3b)
		誠実性条件の違反 (H が行なった行為 P が望ましくない)	(3c)
	詫び	誠実性条件の違反 (S は S が遂行した行為 P が H にとって不利益であると思っていない)	(2d)

なお表中において, S は話し手, H は聞き手をそれぞれ表すものとする。

本稿の婉曲的言及という概念は MT の言及の概念 (表 1 の条件 1,4 に相当する) より広く, APT より明確な概念である。例えば, MT では説明できないアイロニー (1b) の命題内容「ピザが X にある」は行為 A (ピザを食べる) の前提条件 X 「ピザが行為者の手の届くところにある」を指示することによって妻の期待に婉曲的に言及している。

3.3 語用論的不誠実性

発話 U がどのようにして不誠実な表現になっているかを示したのが表 2 である。この表から質の公準や適切性条件の他にも, 関連性の原理や丁寧さの原理, 量の公準などを違反することによっても不誠実性が成り立つことが分かる。例えば, 語用論的アプローチや APT では説明できない一般化された発話 (2a) は, ある特定の暖かい部屋が存在する文脈において (2a) が「話し手はその部屋が好きだ」を含意する点で関連性理論 [9] における関連性の原理を満たすことができるが, 例 2 の場合にはそのような部屋が現在の文脈にないことから関連性の原理に違反している, と説明することができる。

¹本稿では照応を, 先行詞が先行文脈に直接明示されず推論を介して理解できるような間接照応も含んだ広い意味で用いている。

3.4 心的態度の暗示

話し手の心的態度・感情を間接的に伝達するために表 3 に挙げたようなさまざまな標識が用いられる。(1a) や (4a) で用いられている誇張や感嘆詞の使用はその代表的な例である。さらにアイロニー環境が type-1 か type-3 の場合には, (3a) や (3b) のように感謝などの感情表出型の言語行為 (言語的標識 4) を遂行することによって皮肉 (sarcasm) の含みをもつアイロニーとなる。

なおこれらの標識 (特に音調) はしばしばアイロニーに特有の標識であるとみなされるが [3], これらは必要条件ではなく [1] 十分条件でもない [12] ことが明らかになっている。本理論でもこのような標識はアイロニーに特有ではないとみなし, また本理論はこれらの標識自体が必要/十分条件ではないことを示している。

3.5 アイロニーの認識と理解

多くの場合には現在の発話状況がアイロニー環境の 3 条件を満たしていることは話し手と聞き手双方にとって既知であるので, 発話 U がすべての条件を暗黙的に提示していることを聞き手が認識するのは容易である。しかしいくつかの条件の成立が聞き手の信念に含まれていない場合にも聞き手はその発話をアイロニーとし

表 3: 心的態度を暗示するさまざまな標識の例

言語的標識	1. 誇張 — 形容詞・副詞 (本当に, 確かに, ものすごい), 比喩 (～のような) 2. 感嘆詞 — ああ, おお, まあ, へー, ほう 3. プロソディ・韻律 — アクセント, イントネーション, ストレス, 発話速度, 鼻音化 4. 実際とは相反する感情を表す感情表出型の言語行為 — 感謝, 賛辞 5. 終助詞 — 同意・確認 (ね, な), 知らせ・注意 (よ, ぞ, ぜ), 感嘆 (なあ, わ)
非言語的標識	1. 表情 — あざ笑う表情, ふざけるような表情, 無表情 2. 身振り・ジェスチャー

て認識することが可能である。例えば例5のようなこだま的アイロニーの場合には、話し手の発話を理解することによってはじめて聞き手の先行発話を否認する話し手の態度を知ることができる。また例1では腹を満たすという妻の期待を知らなくても(1a)などの発話をアイロニーとして認識することができる。よってアイロニー認識の条件は以下のように定義できる。

定義 3 発話 U が少なくとも2つのアイロニー環境の条件を暗黙的提示していると認識し、かつ不成立であると認識できる条件が一つもなければ、聞き手はその発話がアイロニーである(可能性が高い)と認識する。

この定義は話し手が意図していないのに聞き手がアイロニーと認識する可能性を暗示するが、実際にこのような非意図的なアイロニーの存在 [1] が心理学的に指摘されていることから定義3は妥当であると言える。

ある発話をアイロニーと認識することによって、聞き手は3つの条件の成立の伝達という発語内行為を認識し、それらを聞き手の信念および話し手との共有信念として登録することになる。これがアイロニーの理解であり、多くの場合には3つの条件の成立は聞き手にとっても既知であるので、その効果は特に最も不確かな情報であろう話し手の心的態度の確信となって現れる。しかし既知でない条件がある場合にはそれが成立していることも聞き手が新たに得る情報になる。例えば前述した例1の場合には、(1a)をアイロニーと認識することによってはじめて妻がそれを食べたかったということを夫が知るようになる。つまりアイロニーが話し手の心的態度を伝達するという従来の見方 [3, 6, 13] は本稿のアイロニー論の一部として包含されていることになる。さらに1章で述べたようにアイロニーはさまざまな伝達目標(痛手を与える, ユーモアなど)を発語媒介行為として同時に達成しているのである。

4 おわりに

本稿ではアイロニーの計算モデルおよび計算機処理に向けての基本的な枠組みとして暗黙的提示理論を提案した。従来の計算機処理を指向した研究は、基本的に語用論的アプローチを用いていた [5]、状況アイロニーの概略的分類にとどまる [7] など本稿に比べて明らかに不十分な点が多い。滝澤らの研究 [10] は行為と

発話内容の間に成り立つ因果関係や終助詞の有無など暗黙的提示理論の一部を考慮した検出アルゴリズムを提案している点で最も優れているが、本稿で示したようにアイロニー全体を扱うにはまだ不十分である。

本稿の暗黙的提示の概念は状況理論と行為理論を用いて定式化を試みている [11]。今後はこれに加えてアイロニーの理解・生成のモデルの構築が課題である。

参考文献

- [1] Gibbs, R.W., and O'Brien, J. Psychological aspects of irony understanding. *Journal of Pragmatics*, 16:523-530, 1991.
- [2] Grice, H.P. Logic and conversation. In Cole, P. and Morgan, J. (eds.), *Syntax and Semantics Vol.3: Speech Acts*, pp.41-58, Academic Press, 1975.
- [3] 橋元 良明. 背理のコミュニケーション: アイロニー, メタファー, インプリケーチャー. 勁草書房, 1989.
- [4] Haverkate, H. A speech act analysis of irony. *Journal of Pragmatics*, 14:77-109, 1990.
- [5] 伊藤 昭, 滝澤 修. 対話のモデルに基づくアイロニーの一定式化. 人工知能学会誌, 9(2):283-289, 1994.
- [6] Kumon-Nakamura, S., Glucksberg, S., and Brown, M. How about another piece of pie: The allusional pre-tense theory of discourse irony. *Journal of Experimental Psychology: General*, 124(1):3-21, 1995.
- [7] Littman, D.C., and Mey, J.L. The nature of irony: Toward a computational model of irony. *Journal of Pragmatics*, 15:131-151, 1991.
- [8] Roberts, R.M., and Kreuz, R.J. Why do people use figurative language?. *Psychological Science*, 5(3):159-163, 1994.
- [9] Sperber, D., and Wilson, D. *Relevance: Communication and Cognition*. Basil Blackwell, 1986.
- [10] 滝澤 修, 伊藤 昭. アイロニー表現検出の一手法. 人工知能学会誌, 9(6):875-881, 1994.
- [11] Utsumi, A. How to interpret irony by computer: A comprehensive framework for irony. In *Proc. of RANLP*, pp.315-321, Bulgaria, 1995.
- [12] Ward, G., and Hirschberg, J. Implicating uncertainty: The pragmatics of fall-rise intonation. *Language*, 61:747-776, 1985.
- [13] Wilson, D., and Sperber, D. On verbal irony. *Lingua*, 87:53-76, 1992.